

題「アリとキリギリスのその後」

企画意図

我が国日本の幸福度は、他の先進国に比べて圧倒的に低い。その理由の一つに、仕事・勉強に比べて趣味・娯楽に費やす時間が極端に少ないことが挙げられる。多くの日本人は、普段の生活で留意すべきは週末の過ごし方ではなく、タスクの期日だと認識しているだろう。決してその考えを否定するつもりはない。

しかし、もし仕事・勉強から離れたら、また離れたくなったら、私たちの心の支えは趣味・娯楽に他ならない。ストレス社会の日本において、ストレスを発散せずに作業に取り組み続けられれば、いつか必ず限界がくるだろう。そうならないためにも、日本人はもっと真剣に、仕事・勉強以外の時間を何に費やしたいか、自分と向き合う必要がある。

そして趣味・娯楽を極めたとき、それらは芸術に昇華する。自己満足にすぎなかったものが人の心に感動を与え、はたまた問題解決の糸口になることだってあるのだ。要はその使いようでありバランスなのである。経済に直接の影響がないからといって芸術をないがしろにしてはならない。

「モノの豊かさ」から「ココロの豊かさへ」今の日本に必要なのは、芸術に触れやすい社会を構築していくことだ。幸福とは、精神的な豊かさに他ならないのだから。

テーマ

「普段の生活に溶け込む芸術とその必要性」

ログライン

「キリギリスの生き方とアリの生き方が交わることにより、両者が本当の意味での豊かさを獲得する物語」

登場人物

アリ（農家）

・長女 アメリ

・次女 ナツツ

・三女 チョコ

キリギリス

・ステラ（ギタリスト）

・デクシア（画家）

クモ

・グラペウス（美術館館長兼デザイナー）

あらずじ

キリギリスのステラとデクシア、冬の寒さに耐えかねて家に入れて欲しいと、アリの三姉妹アメリ・ナッツ・チョコに泣きつく。チョコの説得により仕方なく二人を受け入れる。しかし共同生活が始まるのも束の間、冬ごもりにより外出できないストレスからか喧嘩が耐えないアリたち。反対に絵画や音楽などの趣味でストレスを発散するステラとデクシア。見兼ねたステラとデクシア、ナッツとチョコに絵画と音楽を教える。ナッツとチョコはそれらに没頭する。一同は冬の間、趣味に明け暮れる。アメリを除いて。

春が来ると、ステラとデクシアはお礼にとナッツとチョコにそれぞれギターと画材を渡して別れを告げる。別れた後もナッツとチョコは農作業をよそに趣味に明け暮れてしまう。アメリが奮闘するも農作業は遅れ、畑は荒れてしまう。途方に暮れるアメリ。そんなとき、ステラとデクシアがこっちにやってくるのが見える。我慢できなくなったアメリは二人に畑が荒れた責任をなすりつけてしまう。考え込む二人。そこでひらめく。ステラとデクシアはナッツとチョコを仕事に復帰させるため、一晚中何かの作業に取り掛かる。

翌朝、二人はナッツとチョコに素敵なデザインが施された手作りのスコップをプレゼントする。それを見て俄然やる気になるナッツとチョコ。ステラとデクシアも加わり農作業を再開する。しかし疲れを隠せない一同。そこでアメリは提案する、音楽に乗せて作業することを。

案内係「今日は群美術館にご来館いただき誠にありがとうございます。当館はお客様に、より作品を楽しんでいただくため、展示の前に作品が誕生するまでの過程を演劇にてご説明させていただくのが通例となっております。本日も名画を楽しんでいただくために60分少々お時間をいただきたく存じます。本公演は上演時間60分を予定しております。途中、休憩はございませんのであらかじめご了承ください。なお、上演中の、お喋り、飲食、喫煙、許可のない写真撮影の禁止。携帯電話、アラーム付き腕時計など、音の出る機器はマナーモードにさせていただくか電源をお切りいただくようお願い申し上げます。それでは開演までいましばらくお待ちください」

季節、冬。場所、野原。

太陽の光は曇っていて届かず、冷たい風が吹いている。

舞台中央に二匹のキリギリス、体を寄せ合ってうづくまっている。

一匹の隣にはギター、もう一匹の隣にはキャンバスとイーゼルが置かれている。

ステラ「しっ、死ぬううう！」

デクシア「寒い……」

ステラ「腹減ったー！」

デクシア「眠い……」

ステラ「寝るな！ 死ぬぞ！」

デクシア「雪山か」

ステラ「ああもう！ 寒い眠い腹減った！」

デクシア 「高校生か」

ステラ 「寒い眠い腹減った！ 宿題やってない！」

デクシア 「だから高校生か」

ステラ 「うちら去年はどうやって冬を越したんだっけ」

デクシア 「去年はまだ生まれてないでしょ？ 私ら生まれたのちょうど二ヶ月前だよ確か」

ステラ 「そうだった、まだ半年も生きてないや」

デクシア 「もうしっかりしてよ」

ステラ 「ダメだ、寒さで何も考えられない。そうだ、このギター燃やして暖を取ろう」

ステラ、ギターの上でマッチをすろうとする。

デクシア 「やめてよ、ギターはステラの宝物でしょ？」

ステラ 「だってこのままじゃ寒さで二人とも死んじゃうよ？ だったらいつそのこと……」

デクシア「やめなつて！ これ燃やしたとして、助かった後はどうするの？ もうギター弾けなくなつちやうんだよ？」

ステラ「……ごめん、どうかした。これがなきや生きていけないもんな。ごめんよ愛しのギターくん」

デクシア「男の子だったのね……」

ステラ「だとしても暖を取らないと、これじゃ時間の問題だよ」

デクシア「わかってるよ」

ステラ「何か燃やせるものないかな、燃やせるもの燃やせるもの……」

ステラとデクシア、燃やせるものを探す。

ステラ、デクシアの後ろポケットに筆が入ってるのを見つける。

デクシア「ねえ、その筆……」

デクシア「え？」

ステラ「そういえばスケッチブックとそれを立てるイーゼル、これって全部木でできてるよね」

デクシア「は？」

ステラ「これだけあればだいぶもつな」

ステラ、キャンバスとイーゼルの上でマッチをすろうとする。

デクシア「はああ!？」

ステラ「仕方ないだろ生きるためだ!」

デクシア「ダメに決まってるでしょ!？ 何考えてんのステラ!」

ステラ「ギター燃やせないんだからデクシアの持つてる画材道具燃やすしかないだろ?」

デクシア「もう一度同じこと言ってみろ? てめえの触覚引きちぎってギターの弦にすんぞ!」

ステラ「なんつ、なんちゆう恐ろしいことを!」

デクシア「そんなもって春がきたらギターコード覚えて桜坂熱唱してやる!」

本を持ったグラペウス、登場。

グラペウス「この二匹のキリギリス、どうしてこうなったかと言いますと、それは二ヶ月前まで遡ります」

季節、秋。同、野原。夕方。

グラペウス「秋の日のキリギリスは、昼は寝てばかり。夕方になると、ギターを弾いたり絵を描いたり、そんなことをしながらのんびり暮らしていました。キリギリスは働こうとはしませんでした」

ステラ「今日も夕日が綺麗だねえ。そんな時はギターを奏でたくなるものさ」

デクシア「この夕日を持って帰りたいから私は絵を描くの」

グラペウス「そんなことをしていると、キリギリスの前を大きな荷物を抱えたアリが通りかかりました」

荷物を抱えたアメリ、入り。

ステラ「これはこれはアリさん、何をしてるんだい？」

アメリ「キリギリスさん、わたしは食べ物を運んでいるんですよ」

ステラ「ふーん。だけど、ここには食べ物がいっぱいある。どうしていちいち家に食べ物を運ぶんだい？」

デクシア「私たちみたいに、お腹が空いたらその辺にある食べ物を食べて、あとは楽しく絵を描いたり、音楽を奏でたりしていればいいじゃない」

アメリカ「でもね。キリギリスさん。今は秋だから食べ物がたくさんあるけど、冬が来たら、ここも食べ物はなくなってしまいますよ。今のうちにたくさんのお食糧を集めておかないと、あとで困りますよ」

ステラ・デクシア「ハハハハハッ」

ステラ「まだ秋が始まったばかり。冬の事は冬が来てから考えればいいですよ」

デクシア「その通り、まだ気が早いですよ。そうだ、よかったら私と一緒に絵を描きませんか？」

ステラ「ギターなんてのもどうですか？ リラックスできますよ？」

アメリカ「いえ、私にはまだやることがあるので」

ステラ「仕事づくしじゃ、集中力続きませんよ？」

デクシア「たまには休憩を取ってもバチは当たりませんよ」

アメリカ「でも……」

ステラ「いいじゃないですか少しくらい」

デクシア「そうそう、気分転換だと思って」

アメリカ「そ、そうですか……。そうですよね、たまには気分転換が必要ですよね。なら、少しだけ」

デクシア、筆を渡す。

アメリカ、キャンバスに絵を描いていく。

グラペウス「アリはギリギリスから筆を受け取りました。ここ最近仕事に明け暮れていて、ストレスを抱えていたアリは、気分転換というギリギリスの誘いを断れませんでした。アリは目の前に咲いている一輪の花を描きました。描いていくにつれ、アリは自分が絵を描くことを楽しんでいることに気がつきました。もう少しで完成、というところまでできたのですが……」

だんだん笑いがこみ上げてくるステラとデクシア。

デクシア「ちょっとアリさん、それは、なんですか？」

アメリカ「えつと……」

ステラ「まさか毒キノコじゃないですよね？」

アメリカ「そこに咲いている花ですけど」

ステラ・デクシア「アハハハハッ」

ステラ「すいませんつい、アリさんがなかなか個性的な絵を描かれるものですから」

デクシア「気にしないでください、最初から上手な人なんていないんですから」

ステラ「それじゃまるでこの絵が下手だって言ってるみたいだに聞こえちゃうよ」

デクシア「あつ、ごめんなさい。決してそういう意味で言ったんじゃないんですよ？」

アメリカ「……」

ステラ「今度はギターに挑戦してみましよう。なーに簡単なことです、指で弦を弾けばいいんですから」

ジャーソン

ステラ「こんな感じにね。どうぞやってみてください」

ギターを受け取るアメリカ、弾いてみると聞いたことのない不快な音色が流れる。

耳をふさぐ二人。

ステラ「アリさん！　アリさん！　すみませんギターの調子が悪いみたいなので、ギターはまた今度にしましようか」

アメリカからギターを取り上げるステラ。

ステラ「練習すればきつとうまくなりますから、あまり落ち込まないでください」

アメリカ「下手だったんですか今の」

ステラ「……」

デクシア「決してそういうわけではないんですよ？ ただあまりに個性的な音色だったもので……」

アメリカ「下手だったんですね」

デクシア「……」

ステラ「最初はみんなこんなもんです。指の形からお覚えていきましょう、形から入るのも大事です」

デクシア「まずは好きになることから始めましょう？ 何枚も絵をかけば自然と絵を描くことが好きになるはずです。また一緒にどうですか」

ステラ「明日もこの時間にうちらいるんで、また一緒にリラックスタイムを過ごしましょう」

デクシア「私たちと一緒に楽しい時間を過ごしましょう」

アメリカ「結構です！」

デクシア「なんだか体がだるくなってきた」

ステラ「寒い眠いだるい！」

デクシア「大学生か」

ステラ「寒い眠いだるい！ レポート出してない！」

デクシア「……」

ステラ「だから大学生かつ。……て、つつこめやーい」

倒れているデクシア。

ステラ「ちよつと大丈夫！？ うわすごい熱……。いよいよヤバいぞ、どこか暖をとれる場所を探さないと！ くそ、こんなところにそんな場所はない！ まず火だ！ 火を起こそう！」

ギターを見つめるデクシア。

ステラ「ダメだ、それだけできない」

デクシア「それでいいのよ……。あなたはそれでいいの……」

ステラ「うちが良くてもデクシアがダメじゃ意味ないだろう。何かないか、何か……。そうだ、いらぬスケッチブックとかない？ この際何も描かれてないやつでもいい。それを燃やすんだ、いいね。スケッチブックなら消耗品だからまた手に入れればいいでしょ？」

デクシア「スケッチブックならここに入ってる……」

ステラ「OK」

ステラ、デクシアのスケッチブックを漁る。

ステラ「ダメだ、全部何かしら絵が描いてある。あんたホント絵描くの好きねえ」

デクシア「どういたしまして……」

ステラ「で？ どれなら燃やしてもいい？ これは？」

デクシア「それは私が初めて描いた作品……」

ステラ「じゃあこれは？」

デクシア「それはいちばん上手く描けた作品……」

ステラ「これだったら？」

デクシア「それは彼氏の肖像画……」

ステラ「あんた彼氏なんかいたの？」

デクシア「カラスに食べられた……」

ステラ「辛いこと聞いて悪かったね！　じゃあこれは？」

ステラ「それは……、私が描いた絵じゃない」

デクシア「じゃあ燃やしてもいいね」

ステラ「待って！」

デクシア「？」

ステラ「燃やさないで」

デクシア「なんで？　ステラが描いたわけじゃないんでしょ？」

ステラ「私が描いた絵じゃないけど、なんだか燃やしちやいけないような気がして……」

デクシア「どうして？」

ステラ「その絵は、特別なの」

デクシア「特別って……、一体何が特別ななの？」

ステラ「わからない、けどその絵は……」

ステラ、意識を失う。

デクシア「ステラ？ ステラ！ 特別って、この絵の何が特別ななの？ そもそもこの絵の作者は誰なんだよ！ こんな毒キノコに、なんの価値が……！ 毒キノコ……？ 思い出した！ この絵の作者はあの時のアリさんだ！ だとしたら、近くにアリさんの家があるはず！ 食料だって十分にあるよねきっと！ やったねデクシア！ うちら生き残れる！」

ステラ「……」

デクシア「こうしちゃいられない！」

ステラ、デクシアに肩を貸す。

ステラ、アメリカの家を探し回る。

ステラ、アメリの家を見つける。

ステラ「すみません！ すみませんすみません！ 開けてください！」

アメリ宅「……」

ステラ「寒くて凍えそうなんです！ 食料もなくて、このままだと死んでしまうんです！」

アメリ宅「……」

ステラ「二人いますけど、一人でいいです！ この子もう意識ないんです！ この子だけでもいいんで入れてあげてください

い！ どうか、どうかお願いします！」

アメリ宅「……」

崩れ落ちるステラ。

ステラ「どうか……、お願いします……」

するとチョコが出てくる。

チョコ「入ってもいいよ」

デクシア「え……」

アメリ、出てくる。

アメリ「助け合いが、我が家の家訓なんです」

気を失うステラ。

アメリ「ちよ、ちよっと。チョコ、この二人を中まで運ぶよ」

チョコ「アイアイサー」

アメリ「ナッツー、ちよっと来て手伝ってほしい！」

暗転。

#2

外は吹雪、強い風が吹く。

アメリ宅、室内。

デクシアが一人横になっている。それを間近で見つめるチョコ。

デクシア「んん……」

チョコ、驚き物陰に隠れる。恐る恐る顔を出す。

目を覚ますデクシア。

デクシア「ここは……、家の中……？ どうやってここに……」

辺りを見回すデクシア、チョコと目が合う。

デクシア「あ」

隠れるチョコ。

デクシア「どうも……」

動かないチョコ。

デクシア「お邪魔してます……」

チョコ、逃げるようにはける。

デクシア「ちよつと待って！」

袖から顔を覗かせるチヨコ。

デクシア「家に入れてくれてありがとう。助かったよ」

チヨコ「……」

デクシア「この家に住んでるのは君だけ？」

首を横に振るチヨコ。

デクシア「もう一人のキリギリスは？ どこに行ったかわかる？」

指差すチヨコ。

デクシア「あっち？ あっちっていうのは外のこと？」

頷くチヨコ。

デクシア「じゃあステラは私を助けた後、一人あの吹雪の中に戻っていったってこと……？ こうしちやいられない、すぐに探さなきゃ」

チヨコ、はげようとするデクシアをとうせんぼう。

デクシア 「ごめんね、友達が外で凍えているの。助けにいかなきゃ」

首を横に振るチョコ。

デクシア 「今こうしてる間にもステラは一人震えているはず。助けてくれたのには感謝するけど、友達を放ってはいられないよ」

なおも首を振るチョコ。

デクシア 「わかった、家でおとなしくしてる。……っと見せかけてっ！」

デクシア、チョコをフェイントでかわそうとするが素早いチョコの動きに阻まれ続ける。

ナッツ、登場。

ナッツ 「あの、何してるんですか？」

デクシア 「君は？」

ナッツ 「申し遅れました。アリの三姉妹、次女のナッツです。ディフェンスとオフENSEの攻防を邪魔してしまつてすみません」

デクシア 「別に好きでいい試合してるわけじゃないから。友達がまだ外に取り残されてるみたいなの。お願い、助けてくれたお礼は必ずするから、行かせてくれないかな」

ナッツ 「友達ってステラさんのことですか？」

デクシア 「そう。知ってるの？」

ナッツ 「それならさっき、外に忘れ物したとかで出て行きましたけど」

デクシア 「この吹雪の中？」

ナッツ 「ええ、なんでも命より大事な物だとか」

デクシア 「命より大事な物……」

ステラ、ギターと画材を持って外から戻ってくる。

ナッツ 「どうやら帰ってきたみたいですね」

ステラ、入り。

ナッツ 「お帰りなさい」

ステラ 「ただいま戻りました。デクシア！ よかった、体の具合はどう？ 痛いところとかない？」

デクシア「うん、アリさんたちのおかげでもう大丈夫」

ステラ「まだ無理はしないでね、安静にしてなきゃダメだよ？」

デクシア「わかってる」

ナッツ「探し物は見つかりましたか？」

ステラ「うん、おかげさまで。わがまま言ってごめんね。ナッツに書いてもらった地図がなかったら戻ってこれなかったよ」

ナッツ「いえ、本当は僕も付き添えばよかったんですけど、なんせ姉が堅物なもんで」

ステラ「ううん、この吹雪じゃそれが当然。地図だけで十分助かった、ありがとう」

チヨコ「これ何？」

デクシア「それは絵を描くときに使う道具で、イーゼルっていうんだよ」

チヨコ「ふーん」

アメリカ、入り。

チヨコがイーゼルを触ろうとすると、アメリカが止める。

アメリカ「触つちやダメでしょ、大事なものなんだから」

デクシア「構いませんよ、壊れやすいものでもありませんし」

アメリカ「アリの三姉妹、長女のアメリカといいます。次女のナッツと、三女のチョコです。チョコ、挨拶はしたの？」

首を振るチョコ。

アメリカ「すみませんこの子まだ人見知りで。ちゃんと挨拶しなきゃダメでしょ？」

チョコ「チョコです……」

デクシア「よろしく、チョコちゃん。私はデクシアと言います。この度はなんとお礼を言ったらいいか……、皆さんは命の恩人です。助けていただき本当にありがとうございました」

アメリカ「家の前に人が倒れていたら、誰だってそうします」

ナッツ「家が狭くなるって、渋ってたくせに」

アメリカ「余計なことは言わんでよろしい」

ナッツ「そこにいるチョコが、どうしても助けたいって。お礼はチョコに言ってあげてください」

デクシア「ありがとうね、チョコちゃん」

笑うチョコ。

アメリ「このスペースで私たちと生活してもらいます。なんせ狭い家なもんで、窮屈で申し訳ありません」

ステラ「とんでもないです」

デクシア「家の中に入れていただいただけでも、こちらとしては十分ですから」

アメリ「それではこちら側半分を私たち姉妹のスペースとし、そちら側半分をお二人のスペースで使ってもらおうということでもよろしいでしょうか」

デクシア「ええ、構いませんが……」

ナッツ「わざわざ分ける必要がある？ みんなで広く使えばいいのでは？」

ステラ「うちらはそれでも全然構いませんよ？」

アメリ「そういうわけにはいきません、お二人は大事なお客様ですから。食事は朝昼晩の一日三食、食事の際はお声かけしますのでそれまでどうぞおおくつろぎください。それでは私は食料庫の整理がありますので一旦失礼します。何かあればナッツかチョコにお申し付けください」

アメリカ、はげ。

ナッツ「なんだか姉さんの機嫌がいつにも増して悪い気がする」

ステラ「うちらが上がり込んだせいかな」

チョコ「家が狭くなっちゃうから？ それとも集めた食べ物いっぱい食べられちゃうから？」

デクシア「みんなの食べる分が、私たちのせいで減ってしまうとしたら本当にごめんなさい」

ナッツ「いえ、その心配はないと思います。僕ら三人の一年分は備蓄してありますから、ギリギリスが二人増えたところでなんの問題もありません」

チョコ「じゃあなんで？ なんでお姉ちゃんは怒ってるの？」

ステラ「心当たりが……」

デクシア「ないこともないか……」

グラペウス、登場。

グラペウス「かくしてアリとギリギリスは共に冬を越すことになりました。全く生き方の違うアリとギリギリス、この先、うまくやっていけ

るのでしょうか」

グラペウス、退場。

#3

舞台片側にアリの三姉妹、もう片側にギリギリスの二人がいる。

ステラは新曲作り、デクシアは画材の整理に夢中。

アメリカ、書類を広げ、バインダーに何かを書き込みながら食料の備蓄具合を記録している。

ナッツ、アメリカが書き終わった後の書類を受け取り、誤りがないか確認している。ナッツの横には書類が何枚か積まれている。

チョコ、暇そうにしている。

アメリカ「はいこれ、次」

アメリカ、バインダーの書類を剥がしナッツに渡す。

ナッツ、それを確認していく。

ナッツ「問題なし」

アメリ「ちゃんと確認した？」

ナッツ「大丈夫だよ、ミスはなかった」

アメリ「そう言って前に一度、イチゴの収穫量と消費量の合計が合わなかったことがあったよね」

ナッツ「あれはチョコが隠れてつまみ食いしてたのが原因だろ？」

チョコ「あたし食べてないもん！」

ナッツ「どうだか」

チョコ「食べてないもん！」

アメリ「はいはい、私が悪かったから静かにしてね。この作業は今日中に終わらせたいから」

ナッツ「ミスはないよ、何度確認しても同じことさ」

アメリ「そう、ありがとう」

作業に戻る。

アメリ「ん……、合わないな……。ナッツ、ちょっとこれ計算し直してみて」

ナッツ「……うん、合わないね。先月と今月で知らない間にイチゴジャムが一キロ減ってる」

アメリ・ナッツ、チョコを見つめる。

チョコ「あたし食べてないよ!？」

ナッツ「ふーん」

チョコ「食べてないったら食べてないもん!」

ナッツ「じゃあなんで計算が合わないんだよ」

チョコ「そんなの知らないもん! ナッツが足し算を間違ったんだよ!」

ナッツ「筆算もできないチョコに言われたくないな!」

チョコ「筆算できるもん!」

ナッツ「へーそうですか、じゃあ $25+36$ は?」

チョコ「えっと……5、6、7、8……。二桁の筆算はまだ習ってないもん!」

ナッツ 「筆算は二桁ができなきゃ意味ないだろ!？」

アメリカ 「いい加減にして! 集中できないでしょ？」

チョコ 「だってナッツがー!」

アメリカ 「チョコもチョコだよ、なんでもっと静かにできないの？」

チョコ 「だって暇なんだもん、外で遊びたいー」

アメリカ 「冬なんだから仕方ないでしょ? 外は吹雪だし、家から出たら凍っちゃおうよ?」

チョコ 「でもやだ! 外で遊ぶ!」

アメリカ 「わがまま言わない!」

チョコ 「やだ! 遊ぶ!」

チョコ、ナッツの隣に積んであった書類を掴み取る。

アメリカ 「ちょっと何するの! 返しなさい」

チョコ「やだ！」

アメリカ「どうしてこんなにも落ち着きがないの？ いつもそんな子じゃないでしょ？」

ナッツ「無理もないさ、チョコにとっては初めての冬ごもりなんだ、外に出れなくてストレスが溜まってるんだよ」

アメリカ「毎年のことだから我慢してもらわなきゃ困る。わかったからちよつと落ち着いて、それを返しなさい。ナッツも手伝って」

ナッツ「えーめんどうくさー」

チョコ「遊んでくれるなら返す」

アメリカ「無理なものは無理なの！ さあ返して！」

チョコ「やだ！」

アメリカ「返しなさい！」

チョコ「やだ！」

チョコとアメリカが書類を引つ張り合う。書類が破ける。

アメリカ「せっかくここまで記録つけてきたのに、またやり直し……。どうしてくれるのチョコ！」

チョコ「ごめんなさい……」

アメリ「冬の間もやることはたくさんあるんだから、手間とらせないでよ！」

ナッツ「やることなんて大してないだろう。掃除して洗濯して食事して、寝るだけじゃないか」

アメリ「あなたたちはそうかもしれないけどね、私は違うの！ 食料の保存状態をチェックしたり、収穫量から消費量を導き出したり、だいたいナッツがチョコの手が届くようなところに置いとくのがいけないでしょ？」

ナッツ「はあ！？ じゃあどこに置いとけばよかったっていうんだよ？ 棚の上ですか？ それとも尻の下にでも敷いておけばよかったですか？」

アメリ「姉さんに向かってその態度はなに！？」

ナッツ「僕は複数の態度を同時に示していますけどどの態度のことを言ってるんでしょうか！」

チョコ「うえーん」

ジャーン。

ギターの音色に一同動きが止まる。

ステラ「チョコちゃんおいで、いい暇つぶしを教えてあげる」

チョコ「……なにそれ？」

ステラ「ギターっていうの」

チョコ「ギター？」

ステラ「そう。弦を弾いて音を奏でるんだよ。やってみる？」

チョコ「うん！」

ステラ「こうやって膝に置いて、指で弦を抑えるんだ」

チョコ「んー、届かないー」

アメリ「指の形がチョコにはまだ難しかったかもね」

チョコ「えー」

ナッツ「僕もやってみていいですか」

デクシア「どうぞ」

アメリカ「言つとくけど、そんな簡単に弾けるものじゃないよ」

ナッツ、ギターをうまく弾く。

デクシア「なかなか筋がいいね」

ナッツ「ほんとですか、ありがとうございます」

チョコ「ぶー」

アメリカ「ぶー」

デクシア「チョコちゃんこっちおいで。これだったらチョコちゃんもできるよきつと」

チョコ「なにー？」

デクシア「絵を描くの」

チョコ「絵を描く？」

デクシア「チョコちゃんの好きな色はなに？」

チョコ「オレンジ！」

デクシア「お日様の色だね」

デクシア、チョコにオレンジ色の絵の具のついた筆を渡す。

デクシア「これで好きなもの描いてみて」

チョコ「なんでもいいの？」

デクシア「なんでもいいよ」

チョコ、自分の手のひらに絵の具を塗りたくる。

アメリ「チョコ、そういうことじゃなくてね……」

デクシア「待ってください」

チョコ、自分の手のひらをキャンバスに何度も押し付ける。

チョコ「みて、あたしの太陽できた〜」

デクシア「すごい……、すごいよチョコちゃん！ 上手！ とっても上手！ 自分の体で絵を描くなんて発想なかった……。斬新で自由な発

想、「この子天才かもしれません！」

アメリカ「は、はあ……。それは良かった」

デクシア「もっと描いてみて！ 次は何色がいい？ いくらでも使っていていいからね！」

ナッツ「この音色、なんだか気持ちのいい響きですね」

ステラ「それAm（エーマイナー）だよ！」

ナッツ「エーマイナー？」

ステラ「コードって言うてね「音の重なり」のことをいうんだけど、複数の音が同時に鳴っている状態のことを指すわけ。音は重なることで独特な響きを生むんだけど、そのAm（エーマイナー）はコードの一種なんだ。それを自分で見つけちゃうなんてナッツは音楽の才能があるよ！」

ナッツ「本当ですか？ ありがとうございます嬉しいです！」

ステラ「このコードっていうのを覚えれば、弾き語りができるんだ。自分で曲を作ったりもできるようになるんだよ？」

アメリカ「芸術って……。芸術って一体なんなんだああ！」

グラペウス、登場。

グラペウス「それからというもの、ナッツはギター、チョコは絵を描くことに没頭しました。冬の間、一同は趣味に明け暮れました。たった一人、アメリを除いて。そうして長かった冬が終わり、ようやく春が来ました」

季節、春。

デクシア「本当にお世話になりました。このご恩は一生忘れません」

アメリ「私たちは当然のことをしたまでです」

ナッツ「あの、お二人さえよければ、このままうちで暮らしていただいても……」

ステラ「ナッツ、お姉さんを困らせるようなことを言うてはダメだぞ？」

ナッツ「はい……」

デクシア「それには及びません。遊び歩くのが、ギリギリスの生き方ですから」

アメリ「そうですか。チョコ、挨拶は？」

チョコ「……」

デクシア「さみしくなるね。これ、良かったら使って」

デクシア、画材道具を一式チョコに渡す。

アメリカ「そんな、いただけません。命より大事だと言っていたものを」

デクシア「いいんです。命より大事なものを、命の恩人に託すことは悪いことではないと思います」

アメリカ「しかし……」

ステラ「うちからも」

ステラ、ギターをナッツに渡す。

ナッツ「ステラさん……」

ステラ「受け取ってくれ」

ナッツ「一生大事にします」

デクシア「あの、実はアメリカさんにお見せしたいものがあるんです」

アメリカ「なんですか？」

デクシア「この絵です」

デクシア、アメリカが描いた絵を出す。

アメリカ「ああ、あの時の。まだ持っていてくださったんですか」

デクシア「はい、この絵があったから私たちは助かったんです。私たちにとって、この絵は何よりも価値があります」

アメリカ「そんな下手くそな絵、なんの価値もありませんよ」

デクシア「そう言わないでください。私たちにとって、この絵は特別なんですから。もしアメリカさんさえよければ、この絵を譲ってもらえませんか？」

アメリカ「ええ構いませんよ？ 私には芸術はわかりませんから」

デクシア「ありがとうございます。この絵を見て、みなさんを思い出します」

チョコ「これ、あげる」

チョコ、ステラに一枚の絵を渡す。

ステラ「これは、チョコちゃんが初めて描いた絵じゃ……。そんな大事なものの、いいの？」

チョコ「うん！」

ステラ「ありがとう。宝物にするね」

デクシア「それではみなさん、お元気で」

ステラ「また必ず会いましょう」

デクシア「バイバイチョコちゃん」

チョコ「バイバイ」

ステラ・デクシア、はげ。

アメリ「さーてと、春になったし、やること山積みだよ？　まずは食料の備蓄がどのくらい残ってるかを調べて、その後畑に種をまいて。あつとその前に耕さなきゃね……、つておいつ」

ナッツはギターを弾き、チョコは絵を描き始めている。

アメリ「ちよつと、遊びの時間はもう終わり。春になったんだからやることやらないと、ナッツ！」

ナッツ「今『別れ』をテーマに新曲が書けそうなんだ、もう少し待ってよ」

アメリカ「ほらチョコも、いい加減働くよ？」

チョコ「今仕上げの最中でどうしても手が離せないの、ちょっと待ってて」

アメリカ「もう二人とも、そんな悠長なこと言ってもらえないよ。春の間に種を蒔いておかないと。今のままじゃ今年の冬は絶対食べ物が足りなくなるんだから」

チョコ「冬のことは冬になってから考えればいいんじゃない？」

アメリカ「どこかで聞いたようなフレーズだな。冬になってからでは遅いの、だからギリギリスさんたちは私たちを頼ってきたんでしょ？ほら、行くよ？」

ナッツ「うるさいなあ、姉さんは芸術を理解できていないから、僕らの気持ちがわからないんだよ。この情熱は誰にも止められないのさ」

アメリカ「……え？」

チョコ「そんなに働きたきやお姉ちゃん一人で働いたら？ あたしたち畑を耕すよりもっと大変なことしてるの、芸術ってそれくらい難しいんだから」

アメリカ「……何それ、芸術ってそんなに偉いの？ いくら芸術を頑張ったって、お腹が膨れるわけじゃないでしょ！？ もういい！ 一人でやる！ 二人の食べる分無くなっても知らないから！」

アメリカ、はげ。

グラペウス、登場。

グラペウス「趣味から離れられなくなってしまったナッツとチョコ。二人をよそにアメリカは一人で畑を耕そうとしますが、たった一人で三分の食料をまかないきれるのでしょうか。一方その頃、ギリギリスたちはというと……」

電話が鳴る。

グラペウス「ちよつと失礼」

グラペウス、舞台中央へ移動。

グラペウス「はいもしもし。ええ私ですが、……え？　なんですって？　契約はあの内容で成立したはずですが。一体何が問題だというんです？　値段？　値段がなんだって言うんですか。私は、子供からお年寄りまで、幅広い年齢層にあなたの作品を楽しんで頂きたいだけです！　そのためには、できるだけ安い料金に設定にする必要があるんです！　え？　契約解除？　ちよつと待ってください！　ちよつと！」

電話が切れる。

グラペウス「まったく芸術家気取りが」

ステラとデクシア、入り。グラペウスの前を通る。

デクシア、画用紙を一枚落とす。

グラペウス「落としましたよ……」

デクシア「あ、すみませんどうもありがとうございます」

グラペウス「これは……」

画用紙に描かれた絵に見入るグラペウス。

デクシア「どうかされました？」

グラペウス「この絵をいただけませんか」

デクシア「え？」

グラペウス「お金ならいくらでも出します。この絵を譲っていただけませんか」

ステラ「ちょっと待ってください、いきなりなんなんですか」

グラペウス「私は今まで、名画と呼ばれる作品を数多く見てきました。しかし、未だかつて、こんなにも感動を覚えた作品に出会ったことが

ありません。この色彩感覚、アバンギャルドな造形美、斬新かつ今までにない自由な発想！この素晴らしい絵をどうしても私の美術館に展示したいのです！」

ステラ「急にそんなこと言われても……」

デクシア「実は、この絵は私たちが描いたものじゃないんです」

グラペウス「ではどなたが……？」

デクシア「知り合いのアリさんです」

グラペウス「ではそのアリさんを紹介していただけませんか？」

デクシア「構わないですけど……」

ステラ「その前に、あなた一体何者なんですか？」

グラペウス「申し遅れました。わたくし、ユーシープ美術館館長兼デザイナーをやっております、クモのグラペウスと申します。どうぞごひいきに」

ステラ「デザイン……、何？」

デクシア「デザイナー……、私も聞いたことない」

グラペウス「デザイナーとはさまざまなもののデザインを手がける仕事です。そしてデザインとは、『美しさ』や『使いやすさ』などの狙いを実現するために創意工夫することです。ウイキペディアより」

ステラ「狙いを実現……」

デクシア「創意工夫……」

グラペウス「例えばこのペン、普通の羽ペンのように見えますが、この羽は付け替えることができます。そのときの気分に合わせて付ける羽を変えるのです。羽の種類は鳥の数、ですから1万種の中から選ぶことができます」

ステラ「一万種……」

グラペウス「そしてこのグリップ、材質は耐久性に優れたカシの木を使用しており、クモの手に馴染むよう糸が巻かれています。だから長い時間書いていてもちっとも疲れない。糸が切れたら自分の糸で巻き直せばいいので、一生使い続けることもできます」

デクシア「一生……」

グラペウス「一万種の羽と自分だけの糸で出来上がったこのペンは、紛れもなく世界に一つだけのペンです」

デクシア「素敵……」

グラペウス「ペン一つとっても、ここまでこだわるのがデザインなんです。一見無意味なように思えますが、自分好みにデザインされた道具

とそうでないものとは、同じ作業でもモチベーションが違います。私にとってこのペンは、握るだけでやる気がみなぎってくる、そんな魔法のようなペンなんです」

ステラ「く、ください！」

グラペウス「残念ながらこのペンは試作途中なので差し上げることではできません。しかしこの絵の作者をご紹介していただいた暁には……、お礼としてこのペンをお二人分ご用意しましょう」

ステラ「ぜ、ぜひ！」

デクシア「ちょっと待って！ 私たちを物で釣る気ですか？」

ステラ「あ、ごめん、つい」

グラペウス「決してそういうわけでは」

デクシア「だいたいクモ専用のペンなんて、私たちが使いこなせるわけないでしょ？」

ステラ「それもそうだ。こいつ、えげつない商売してやがる」

グラペウス「ご心配には及びません。お二人には特別に、キリギリスカスタムをお作りします」

デクシア「ついてきてください！」

デクシア、はげ。

ステラ「こころもあっさりと……」

グラペウス「デザインの力です。ちなみにこのペンの名前は、『モチベーションアゲアゲやる気大放魔法っペン』です！」

ステラ「名前ださー」

グラペウス「魔法とペンの間に小さい「つ」が入るのが私のこだわりです」

デクシア、袖から半身出す。

デクシア「何してるの？ もたもたしてたら日が暮れちゃうよ？」

ステラ「はいはい」

ステラ・グラペウス、はげ。

#5

場所、アリたちの畑。

アメリカ、一人で畑を耕している。

アメリカ、疲れて腰を下ろす。

ステラ・デクシア、入り。

ステラ「ちょっと待ってデクシア」

デクシア「何？」

ステラ「グラペウスさん、ついてきてない」

デクシア「うそ、いつから？」

ステラ「ついさっきまでいたと思うんだけど」

デクシア「まいったなー。探してたら日が暮れちゃうし……」

ステラ「先にアメリカさんちに行つて事情を説明しよっか」

デクシア「うん、そうしよう」

ステラ「あれ？ あそこになるの、アメリカさん？」

デクシア「本当だ、一人で何してるんだろ」

ステラ「こんにちはアメリカさん。さっき別れたばかりなのに、なんだか照れくさいですね」

デクシア「アメリカさん、こんなところで何してるんですか？」

アメリカ「ああ、ギリギリスのお二人。見ての通り、畑を耕しているんですよ」

ステラ「畑って……、どれですか？」

アメリカ「ハハ……、この辺全部私たちの畑なんですよ」

ステラ「この辺全部……？」

アメリカ「荒れ放題で、見る影もなくなっちゃいました」

デクシア「どうしてそんなことに」

アメリカ「私一人では手が足りなくて」

デクシア「一人って……」

ステラ「ナッツとチョコはどうしたんですか？ 二人に手伝ってもらったらいいじゃないですか」

デクシア「こんな大きな畑、一人では無理です」

アメリ「二人はもう手伝いません」

デクシア「どうして？ あんなに外に出たがっていたのに」

ステラ「具合でも悪いんですか？」

アメリ「いいえ」

デクシア「では、なぜ？」

アメリ「……あなたたちのせいです」

ステラ「……え？」

アメリ「……あなたたちのせいでこうなったんですよ？」

デクシア「……どういふことですか？」

アメリ「あなたたちがギターやら画材やらを与えるから、あの二人はちつとも外に出なくなりました！」

デクシア「そんな……」

アメリカ「どうしてくれるんですか！ もう食料の備蓄は残りわずか、夏までに種を蒔かなければいけないのに、このままだったら今年の冬は越せない！ 三人とも野垂れ死にです！」

ステラ・デクシア「……」

アメリカ「芸術とはそんなにまで情熱を注いでしまうものなんですか？ 食べることも働くことも忘れてしまうくらい、没頭してしまうものなんでしょうか？ 芸術を理解できない私には、あの二人の気持ちはわからない……」

ステラ・デクシア「……」

アメリカ「すみません熱くなってしまっただけ。お二人は親切で芸術を教えてくださいましたのに、それがこんな結果を招いてしまうとは……」

デクシア「……ごめんなさい。私たち、こんなことになるとは思わなくて」

ステラ「ギターを好きになってくれるのは嬉しいけど、そこまで熱中しちゃうなんて」

アメリカ「お二人は悪くありません、ましてやナッツもチョコも、そして芸術も悪くはないと思います。悪いのは私です。仕事に鬼になっていました。二人にろくな息抜きもさせず、生きるためという正論で縛り付けていた。だから二人はあんなにもめり込んでいったんですよ。二人にとって初めてできた楽しみですから」

デクシア 「しかし無理にでも連れてこないと、いつかは三人とも……」

アメリ 「わかっています。でもできないんです、あの二人の生き生きとした顔を見ると、無理やり引き剥がすことなんて到底できないんです……」

デクシア 「アメリさん、あなたはとっても優しいお姉さんです。私たちもなんとかいい方法を考えます」

ステラ 「アメリさんたちはうちの危機を救ってくれた。だから今度は、うちらがアメリさんたちを救う版です」

アメリ 「ありがとうございます……」

ステラ 「とは言ったものの……、仕事へのモチベーションってどうやって高めればいいの？」

デクシア 「二人にやる気を出してもらわないことにはね……」

アメリ 「仕事へのモチベーションを高めて、二人にやる気を出してもらおう……。そんな魔法みたいなこと、できるんですかね」

ステラ 「モチベーション……？」

デクシア 「やる気……？」

ステラ・デクシア 「魔法……？」

アメリカ「？」

ステラ・デクシア「その手があった！」

ステラ「アメリカさん、うちに一晩だけ時間をください！」

デクシア「必ずナッツとチョコを仕事に復帰させます！」

アメリカ「そんなことできるんですか？」

ステラ「それができるんです！」

デクシア「信じてもらってもいいですか？」

アメリカ「わかりました、信じます」

ステラ「それじゃ、明日の朝アメリカさんの家に伺います」

デクシア「ナッツとチョコには、私たちがいることは内緒にしておいてください」

アメリカ「どうしてですか？」

デクシア「私たちの見ている前では、二人は言うことを聞いてくれるでしょう。でも私たちがいなくなったら、また元に戻ってしまうかもしれ

れません。それじゃ意味ないんです」

アメリ「わかりました」

ステラ「おっと忘れるところだった、このスコップ、お借りしてもいいですか？」

アメリ「ええ、構いませんけど」

デクシア「それでは、また明日」

アメリ・デクシア、はげ。

#5

翌朝。アメリ宅。

舞台の片側にナッツとチョコがいる。ナッツはギター、チョコは絵を描くことに没頭している。

その反対側の隅で、アメリ・ステラ・デクシアは何やら画策している。

デクシア「いいですか、何気ない感じでお願ひしますよ」

ステラ「ちよつとでも本心がバレたらアウトです」

アメリカ「わかりました」

アメリカ、ナッツ・チョコの元へ向かう。

物陰に隠れながらそれを見守るステラとデクシア。

アメリカ「二人とも、ちょっといい？」

チョコ「いいよー」

ナッツ「畑にはいきませんよー」

アメリカ「そういうんじゃないよ。今日は二人にプレゼントがあります」

チョコ「なにになに？」

ナッツ「誕生日でもないのに？」

アメリカ「ジャンーン！」

アメリカの手には、二人それぞれの好みのデザインが施されたスコップが。

チヨコ「なにそれー？」

ナッツ「スコップ？」

アメリ「好きなを選んでいいよ」

チヨコ「あたしオレンジ！」

ナッツ「いい色だね」

アメリ「なんかー、そうやってカッコ良くしたり可愛くしたりするのはデザインっていうんだってー。面白そうだから買ってみたー」

ナッツ「買ったの？ あのケチでシブチンな姉さんが？」

アメリ「儉約家と言え」

チヨコ「ありがとう！ ねえねえ、これ使ってみてもいい？」

アメリ「もちろん、畑に行つて使つてみな」

チヨコ「うん、使つてみる！ 行つてきまーす」

チヨコ、はけ。

アメリカ「あれ？ ナッツはいかないの？」

ナッツ「僕はその手には乗らないよ。チョコほど単純じゃないんで」

アメリカ「残念だなー。ナッツのスcoopは使えば使うほど味が出て、ロックテイストになってくるって作ってくれた人が言ったのにー」

ナッツ「……」

アメリカ「確か塗装が剥げることも見越したデザインだから、一生使えるとも言ってたな」

ナッツ「なんだか最近部屋が寂しいなあ。この辺に使い込まれたスcoopでも飾ったら良いインテリアになるんじゃないかなあ。ちょっとこのスcoopで試したいんで、行ってきます」

アメリカ「はーい」

ナッツ「あくまでも部屋のインテリアのためだから」

アメリカ「はいはい」

ナッツ、はげ。

ステラ「成功、だよな」

デクシア「成功だよ！」

アメリ「うん、大成功！」

喜びを分かち合う三人。

ステラ「けど、こんなうまくいくとは思わなかった」

デクシア「そう？ 私は初めっからうまくいくと思ったよ？」

アメリ「二人とも本当にありがとう。なんてお礼を言ったらいいか……」

デクシア「お礼なんていらないよ」

ステラ「友達だもんだ当然でしょ？」

アメリ「友達？」

ステラ「あ、ごめんなさい。友達ではありませんでした」

アメリ「ううん、友達だよ」

ステラ「よかった」

デクシア「これで冬は越せそう？」

アメリ「春が終わるまでに畑を耕して、夏が始まるまでに種を蒔けば」

ステラ「あの広さの畑、三人ではだいぶ大変そうだね」

アメリ「うん……。でも、なんとか頑張ってみるよ」

デクシア「あのさあ」

アメリ「？」

デクシア「アメリさえよければ、手伝うよ」

アメリ「え？」

ステラ「え？」

デクシア「五人だったらどう？ 間に合いそう？」

アメリ「たぶん間に合う。でもいいの？」

デクシア「家に泊めてもらった上に食事までご馳走になったんだから、これでもお釣りがくるぐらいよ。ねっ」

ステラ「お、おう」

デクシア「今度は私たちが労働の楽しさを知る番」

アメリ「じゃあお言葉に甘えて手伝ってもらおっかな」

デクシア「アイアイサー」

アメリ「それじゃ早速畑にレッツゴー」

ステラ「え？ 今から？」

デクシア「当たり前でしょ？ 季節は待ってくれないよ？」

ステラ「夜通し作業だったから、もうクタクタだよ……」

アメリ・ステラ・デクシア、はげ。

照明変化。

グラペウス、登場。

グラペウス「もう、あの二人はどこ行ったんだよ。夜通し歩いてもうクタクタだよ。だいたいクモがギリギリスの足の速さについていけないわけがないだろう、ちよつとは加減してくれないと」

グラペウス、退場。

場所、畑。

農作業をしている五匹。

ステラ「さすがに初めての農作業は体にこたえるな」

チョコ「あたしも疲れた、休憩」

ナッツ「またー？ これで何回目だよ。と言っても僕も限界が近い」

アメリ「二人とも久しぶりの農作業だからね、体がなまってんだよきつと」

ナッツ「悔しいけどその通りです。あいつつ……」

アメリ「デクシアは？ 疲れないの？」

デクシア「うん、疲れてはいるんだけど、なんだか気持ちよくて。私農作業向いてるみたい」

アメリ「そう言ってもらえると嬉しいよ」

ステラ「けど、この単純作業を毎日繰り返すと正直気が滅入るよな」

ナッツ「僕らはこれを毎年やってたんですよ？」

ステラ「尊敬するよ」

チョコ「あたしは？」

ステラ「尊敬する」

チョコ「フッフッフ」

デクシア「確かにステラの言う通り、毎日コツコツはともかく、長時間はきついかもね」

アメリ「無理しなくていいよ。適度な休憩も大事なんだから」

デクシア「ありがと。けど私たちにも、仕事へのモチベーションを高めて、やる気が出る何か欲しいよね」

ステラ「仕事内容をデザインするってのは、さすがに無理な話じゃないっすか？」

デクシア「そうなのかな……」

アメリ「あのさ……」

デクシア「ん？」

アメリ「音楽を聴きながらやってみてはどうかかな」

ステラ「え？」

アメリ「音楽に乗せて体を動かせば、単純作業も楽しくならないかな？」

一同「……」

一同「その手があった！」

時間経過。

アメリ「今日の分はこれで終了」

ナッツ「やっと終わった」

チョコ「お腹すいたー」

ステラ「体のどこも動かない」

デクシア「進み具合はどう？ 夏までには間に合いそ？」

アメリ「うんお陰様で。このペースで毎日こなせば大丈夫」

ステラ・ナッツ・チョコ「毎日!？」

アメリ「冗談。五日働いたら二日くらい休みたいよね」

デクシア「それいいかも。一日じゃ休んだ気しないもんね」

アメリ「言ってる」

ステラ・ナッツ・チョコ「ホッ……」

アメリ「私さ、休み取るようになってから、働くのがもつと楽しくなった」

デクシア「私も、働くようになってから、絵を描くのがもつと楽しくなった」

ナッツ「相乗効果ってやつですか」

ステラ「チョコは働くのと休むのどっちが楽しい？」

チョコ「あたしは働いてる時も休んでいる時も、どっちも楽しい」

ナッツ「そんなことあるわけないだろ？」

チョコ「みんなと一緒になら、どんな時でも楽しいはずだよ」

一同「おお〜」

ナッツ「最後はチョコの言葉で締めるのか……」

#6

グラペウス、登場。

グラペウス「そうしてアリとキリギリスは、いつまでも仲良く助け合って暮らしましたとき、めでたしめでた……」

デクシア「ちょっと待った！」

一同「!?!」

デクシア「グラペウスさんのこと、すっかり忘れてた」

ステラ「おっとそうだった！ おーいグラペウスさん、こっちこっち！」

グラペウス「ひどいじゃないですか忘れるなんて、ずっと探してたんですよ？」

ステラ「どうもすみません」

デクシア「グラペウスさん、こちらがアリの三姉妹です」

アメリ「アメリです」

ナッツ「ナッツです」

チョコ「チョコです」

ステラ「三人合わせて〜？」

アメリ「ないないない、そういうのないから……」

ナッツ・チョコ「シュガーズですっ！」

アメリ「あるんかい」

グラペウス「フフツ、なかなか楽しいご兄弟ですね」

ステラ「でしょー？」

グラペウス「わたくし、ユースーヴ美術館館長兼デザイナーのグラペウスと申します。早速ですが、この絵をお描きになったのはどなたですか？」

アメリ「私ですけど……」

グラペウス「あなたでしたか、とても素晴らしい才能をお持ちだ」

アメリ「え？」

グラペウス「この絵を10億円で買い取らせていただきますのですが」

アメリ「え？」

一同「えええーっ!!」

チョコ「ねえねえ10億円で何円？」

ナッツ「うまい棒1億本買える」

デクシア「ゼロ1個しか変わってないよ？」

チョコ「ひい、ふう、みい、まじかやっべ」

デクシア「伝わった〜」

アメリ「ドツキリ……じゃないですよね？」

グラペウス「もちろん」

ステラ「しよ、紹介料とかってもらえたりするんですか？」

デクシア「ちょっと何言ってるの、やめなさいよそういうこと言うの」

ステラ「だってさ〜」

デクシア「だってさ〜じゃなくて、ここにいるみんなに私たちががめついつて思われちゃうでしょ……」

グラペウス「もちろんお支払いしますよ」

デクシア「うおっしや〜！」

ステラ「君って人がまだわからないよ」

グラペウス「では、契約書にサインを願えますか？」

アメリ「待ってください」

グラペウス「？」

アメリ「私まだ売るって決めてません」

グラペウス「お取引額に何かご不満でも？」

アメリ「いいえそういうわけではありません」

グラペウス「では、なぜ」

アメリ「私、お金儲けのためにこの絵を描いたわけではありません。描きたいって思ったから描いたんです。お金のためでも人のためでもありません、気分転換のためです。自分の描いた絵に、値段がついたことが嬉しくないとは言いません。ただ、この絵が誰かの気分転換になったり、誰かを感動させることができるなら、お金はいりません。その事実だけで十分なんです」

一同「……」

アメリ「この絵は差し上げます。ただ一つ条件があります。」

グラペウス「何ですか？」

アメリカ「この先、この絵に値段をつけないこと」

グラペウス「……」

アメリカ「この絵は自由に描いた絵です。見る人も自由に見て欲しいんです。自由に見て、自由に感想を言ってもらって。高級な絵だったら、緊張して素直な感想が言えないと思うんです。誰でも、いつでも見れる、そんなお花みたいな絵でいてほしいんです」

グラペウス「わかりました。この絵は、未来永劫、取引料も観覧料も、受け取らないことをお約束します」

アメリカ「ありがとうございます」

グラペウス「なぜあなたがこのような素晴らしい絵が描けるのか、わかったような気がします」

アメリカ「？」

グラペウス「芸術とは本来そういうものです。『純粋な自己満足』とでもいいでしょうか。見返りを求めず、思ったこと、感じたことを自分で勝手に表現したい、そんな情熱のみで生み出されたもののことを言うのです。反対に、利益を目的に生み出した作品を芸術とは言いません。それは商品です。私が解せないのは、お金儲けのために生み出した作品を、芸術と称して商売をしている輩です。少しでも見返りを求めたら、それは芸術家ではなく商売人だ。そのことをわかっていない人が多すぎます。しかしあなたは違っ
た」

アメリカ「……」

グラペウス「あなたが本当の芸術家であり、この絵こそが本物の芸術作品です」

アメリカ「わ、私は、芸術に縁もゆかりもないただの農家です」

グラペウス「そうなんです、ただの農家でも素晴らしい絵は描けるんです。誰でも芸術家になれる可能性を秘めているんです。芸術は、私たちが考えているよりずっと自由なものだったんです。決めました。この先、この絵を展示する際、この作品に込められたアメリカさんの思いが、見に来てくださった方々に余すことなく伝わる、そんな展示会を開いてみせます」

アメリカ「例えばどんな展示会ですか？」

グラペウス「それはまだわかりません。ですが、とても素晴らしい展示会になるような気がしてならないのです」

グラペウス、持っていた本に何かを書き足す。

グラペウス「それでは、この契約書にサインをお願いできますか？」

アメリカ、グラペウスからペンを受け取り、本に自分の名前を書く。

グラペウス「皆さんは何かご趣味はありますか？」

ステラ・チョコ「絵を描くことです！」

デクシア・ナッツ「ギターを弾くことです！」

アメリ「音楽に合わせて、体を動かすことです……？」

アメリ、グラペウスにペンと本を返す。

グラペウス「なるほど、ダンスですね」

アメリ「ダン……」

グラペウス「音楽に合わせて体を動かすことを、ダンスというんですよ」

アメリ「ダンス……。では、グラペウスさんの趣味は何ですか？」

グラペウス「私ですか、私は……。読書、ですかね」

本を閉じるグラペウス。

終幕

案内係「本日はご来館いただき誠にありがとうございました。本公演はこれにて全て終了となります。お帰りの際はお忘れ物にお気をつけてお帰りください。なお、お足元暗くなっております、ご注意ください。出口付近に名画「自由の花」の展示がございますのでよろしければそちらもご覧になってお帰りください。作者の意向により「自由の花」の写真撮影は無料開放させていただいておりますので自由にお楽しみください」